

学 会 記 事

特定非営利活動法人日本火山学会 平成 24 年度臨時総会議事録

1. 日 時：平成 24 年 10 月 15 日（月）
午後 3 時 50 分から 4 時 20 分
 2. 場 所：長野県北佐久郡御代田町
エコールみよた あつもりホール
 3. 出席者：維持会員 55 名，有効委任状数 90 通
合計 141 名
 4. 議 案：
 1. 新役員紹介の件
 2. 平成 24 年度事業経過報告の件
 3. 議事録署名人承認の件
 4. その他
 5. 議事の経過の概要および議決の結果
出席者（委任状を含む）が 141 名で、定足数 92 名を超えていることを確認し、議長（定款により学会の会長）が平成 24 年度日本火山学会臨時総会の開会を宣言した。
 - (1) 第一号議案 新役員紹介の件
新役員の紹介（資料 1）が宇都会長より報告され、全員異議なくこれを了承した。
 - (2) 第二号議案 平成 24 年度事業報告の件
平成 24 年度の事業について各担当理事からの報告（資料 2）に基づき議長が諮り、全員異議なくこれを了承した。また、除名者について審議を行い、全員異議なく承認した。
 - (3) 第三号議案 議事録署名人承認の件
議長より本日の議事をまとめるに当たり、議事録署名人 2 名を選出することを諮り、森田裕一氏および平林順一氏を選出することを全員異議なく承認した。
 - (4) 第四号議案 その他
桜島大正噴火 100 年記念事業について井口会員より説明（資料 3）があり、全員了承した。
以上、この議事録が正確であることを証します。
- 平成 24 年 10 月 15 日

議 長 宇都浩三 印
議事録署名人 森田裕一 印
議事録署名人 平林順一 印

（資料 1）新役員・理事担当

会長 宇都浩三（産業技術総合研究所）
（兼 将来計画委員・IAVCEI 実行委員）

副会長 井口正人（京都大学防災研究所）
理事 大湊隆雄（東京大学地震研究所：庶務）
寅丸敦志（九州大学大学院理学研究院：編集）
下司信夫（産業技術総合研究所：大会）
森 俊哉（東京大学大学院理学系研究科：財務）
星住英夫（産業技術総合研究所：事業）
金子隆之（東京大学地震研究所：他学会連絡）
高田 亮（産業技術総合研究所：各賞選考）
藤田英輔（防災科学技術研究所：国際）
萬年一剛（神奈川県温泉地学研究所：学校教育）
中村洋一（宇都宮大学教育学部：火山防災）
中田節也（東京大学地震研究所）
山里 平（気象庁地震火山部火山課）
監査 富樫茂子（産業技術総合研究所）
渡辺秀文（東京都）

（資料 2）平成 24 年度事業経過報告

- (1) 庶務委員会（大湊理事）
 1. 入退会希望・会員数について

	維持	学術	一般	団体	名誉	計
2012 年連合大会後	276	677	40	15	8	1,016
入会承認	0	38	2	0	0	40
会員継続	0	7	0	0	0	7
逝去	0	1	0	0	0	1
除名	1	7	0	0	0	8
2012 年秋季大会 総会后	275	714	42	15	8	1,054
2012 年度退会予定	2	0	1	0	0	3

春季総会（連合大会）時点での除名対象者 14 名のうち 7 名から 8 月末までに会費が納付されたため、除名者が 8 名と減少した。

2. 主催・共催・協賛・後援について

協賛 4 件

 - ・第 38 回リモートセンシングシンポジウム（主催：社団法人 計測自動制御学会）
 - ・国際地学オリンピック（主催：NPO 国際地学オリンピック日本委員会）
 - ・日本地熱学会平成 24 年度学術講演会（主催：日本地熱学会）
 - ・海洋調査技術学会第 24 回研究成果発表会（主催：海洋調査技術学会）

共催 0 件
後援 0 件

3. 人事公募について
13件の人事公募について「火山」に掲載を行った。
4. 転載・使用許可について
8件の申請を受け付けた。
- (2) 財務委員会 (森理事, 代読大湊理事)
 1. 会計状況について
現在のところ順調である。
・会費未納状況
- 未払い (9月末時点) : 1,474,000円
- 未収金 (2010年・2011年) : 1,830,000円
- 除名確定による徴収不能額 : 183,000円
会費未納の会員は会費を納入するよう呼びかけがなされた
- (3) 編集委員会 (寅丸理事, 代読大湊理事)
 1. 「火山」発刊状況について
【57-2号】 2012年6月28日発行
【57-3号】 2012年9月30日発行
 2. 「火山」発行予定・掲載予定原稿について
【57-4号】 2012年12月28日発行予定
論説2件, 寄書1件
【58-1号】 2013年3月29日発行予定, 火山特集号を含む
 3. 査読編集状況について
現在査読編集中の原稿: 計15編 (論説12編, 寄書3編)
 4. 桜島火山特集号について
投稿状況 (2012年10月時点) : 計26編 (論説21編 (受理10編, 取下げ2編), 総説1編 (未受理), 寄書2編 (未受理), 解説・紹介1編 (未受理))
締切日当日 (9月30日) の10時現在で15編であったため, 最終的には20編程度となる見込みである。
- (4) 大会委員会 (下司理事, 代読大湊理事)
 1. 2013年度秋季大会について
・会場: 猪苗代町体験交流館「学びいな」
・日程: 2013年9月27日 (金) から10月2日 (水)
- 5月定例総会での報告より1週間前倒し
- 9月27日~28日 プレ現地討論会 (男体那須火山方面)
- 9月28日 公開講座・磐梯山ジオツアー
- 9月29日~10月1日 学術講演会
- 9月30日夕方 懇親会
- 10月1日~2日 ポスト現地討論会 (磐梯・吾妻火山方面)
磐梯山ジオツアー
- ・LOC: 磐梯山噴火記念館・宇都宮大学・防災科学技術研究所
- ・共催: 磐梯山ジオパーク協議会 (猪苗代町, 磐梯町, 北塩原村)
- ・講演申込締切: 2013年8月9日 (金) (予定)
- ・宿泊: ホテルリステル猪苗代 推奨 (送迎バスの都合)
他施設も照会中
- ・平成25年度科研費・研究成果公開促進費に申請予定
2. 2013年度日本地球惑星科学連合大会について
現在, セッション提案を受付中 (10月26日締切).
火山学会が提案母体となっているセッションは4件 (10月10日現在).
2012年度は7件であり, 火山関係のセッション提案を募集中。
- (5) 事業委員会 (星住理事, 代読大湊理事)
 1. 学会シンボルマーク (ロゴマーク) の普及について
・ロゴマーク入りTシャツを70枚 (ロゴ2種類, 7色, サイズL, M) を発売したところ完売した。要望が多いようであれば再発売を予定。
・昨年度作成したロゴマーク入りマグカップの販売中。
 2. 第13回地震火山子どもサマースクールについて
第13回地震火山子どもサマースクール「東と西に引き裂かれた大地のナゾ」が開催された。
・日程: 8月18日 (土), 19日 (日)
・活動場所 ヒスイ王国館, ホテルホワイトクリフ, ピーチホールまがたま, 糸魚川ジオパーク各所など
・主催: 公益社団法人日本地震学会, 特定非営利活動法人日本火山学会, 日本地質学会, 糸魚川ジオパーク協議会
・後援・協賛: 内閣府, 文部科学省, 国土交通省, 消防庁, 気象庁, 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター, 新潟県, 新潟県教育委員会, 糸魚川市, 糸魚川市教育委員会
・参加者: 33名 (小学生18名, 中学生10名, 高校生5名)
来年度は調整中。候補は伊豆半島ほか
- (6) 他学会連絡担当委員会 (金子理事, 代読大湊理事)
 1. 学術雑誌関係について
文科省科研費成果公開促進費の大きな改変に対応し, EPS誌の新装 (レター中心) とJpGU新雑誌

誌（レビュー重視）の創刊準備が進んでいる。

- ・ H25 年度分の公開促進費は EPS と JpGU 新雑誌が別個に申請
- ・ 2016 年 1 月から共同出版し、5 年後の公開促進費申請は一緒に行う
- ・ EPS 運営委員会に JpGU 委員が参加

2. 新装 EPS 誌について

- ・ 現行の article 中心から letter 中心に変更
- ・ オープンアクセスの電子ジャーナルに（投稿料で運営，読者はフリー）
- ・ 2013 年 1 月より先行して全論文をオープンアクセス化
- ・ 現行プラットフォームによる投稿は 2013 年 3 月まで
- ・ 投稿料はレター 400 ドル・その他 800 ドルを予定。減額制度もあり
- ・ 出版社は、現在のテラパブ社から Cambridge University Press を検討中
- ・ 火山学会の分担金はこれまでどおり 20 万円 / 年
- ・ 編集長は北海道大学・蓬田 清さんから東京工業大学の小川康夫さんに交代

3. 新 JpGU 誌について

- ・ 2014 年 1 月創刊予定，2013 年連合大会から原稿募集開始
- ・ レビュー重視のジャーナルとし，インパクト・ファクター 2.5 以上を目指す
- ・ オープンアクセスの電子ジャーナルに（投稿料で運営，読者はフリー）
- ・ 投稿料は国内 2 万円，海外 1000 ドルを予定
- ・ 当初は，幕張大会の国際セッション発表の中から座長推薦により invite
- ・ 出版社は Cambridge University Press を検討中
- ・ 編集委員会 科研費の制約から半数を外国人とする（日本人 25 人+外国人 25 人）

(7) 国際委員会（藤田理事，代読大湊理事）

1. 国際会議セッション提案奨励事業について
1 件の応募があり理事会により採択決定

- ・ 氏名：中道治久（名古屋大学大学院環境学研究科）

- ・ 会議名：AGU 2012 Fall Meeting（2012 年 12 月 3 日～7 日）

- ・ 採択セッション名：Vulcanian Eruptions: Field Observations, Experimental Constraints and Integrated Modeling

- ・ コンピーナー：H. Nakamichi, J. Taddeucci, G.P. Waite, A. Yokoo

- ・ 支給費：20 万円

(8) IAVCEI2013 委員会（宇都理事）

1. IAVCEI2013 学術総会について

- ・ 日程：2013 年 7 月 20 日（土）～24 日（水）

- 19 日：Ice Breaker, 22 日：中日巡見

- ・ 会場：鹿児島市（かごしま県民交流センター他）

- ・ 2nd circular を近日ホームページに公開

- <http://www.iavcei2013.com/>

- ・ 論文投稿締切：2013 年 1 月 31 日

- ・ Grant 申請締切：2013 年 1 月 31 日

- ・ 早期登録締切：2013 年 5 月 1 日

- ・ 火山学会員割引登録料適用

- ・ 若手参加補助（Grant）も同時に募集予定

- ・ 途上国の若手研究者の招聘など会議成功のための寄付の呼びかけがなされた

(資料 3) 桜島大正噴火 100 周年事業について

- ・ 桜島大正噴火 100 周年事業の経緯と予定

2015 年 1 月 12 日に大正 3 年の大正噴火から 100 年を迎えるにあたり鹿児島県・鹿児島市が中心となり、火山に関する様々な情報を発信し防災意識の高揚を図ることを目的に実施

- ・ IAVCEI 学術総会にあわせて会場前で「ふれあい火山フェスタ」を開催予定

- ・ 詳細はホームページを参照

- <http://sakurajima100.org/>

- ・ 火山学会員のブログなどによる情報発信のお願い

- ・ シンボルマークの募集を受付中

日本火山学会 2012 年度秋季大会報告

日本火山学会 2012 年度秋季大会は 10 月 13 日 (土) から 17 日 (水) の日程で、浅間山噴火口から南に 9km、八ヶ岳を遠望し、国際観光都市「軽井沢」と北国街道の宿場町「小諸」とに挟まれた高原の町「御代田」の「エコールみよた」で行われた。浅間山周辺での秋季大会は、1990 年の軽井沢町での開催以来の 22 年ぶりとなった。今大会は、会場に隣接する浅間縄文ミュージアムとの共催となり、浅間縄文ミュージアムでは会期中に浅間山の特別展示が開催され、学会参加者は自由に観覧することができた。会期前後の野外討論会は、10 月 13 日 (土) に浅間山: 黒豆河原周辺の溶岩及び火砕流堆積物を、10 月 16 日 (火) 午後から 17 日 (水) にかけて草津白根山を実施した。また、火山防災シンポジウムと公開講座「火山学者と火山を作ろう!at 浅間」は 10 月 13 日 午後 1 時に会場において実施した。以下に秋季大会の概要をまとめた。

1. 学術講演会

a. 概要

学術講演会は 10 月 14 日 (日) から 16 日 (火) 午前まで実施され、95 件の口頭発表と 92 件のポスター発表、1 件の記念講演が行われ、参加者数は 301 名 (会員 179 名、学生会員 62 名、シニア会員 11 名、非会員 24 名、学部生 21 名、団体会員 1 名、企業展示 3 名) であった。

今大会の学術講演では、口頭発表は「エコールみよた」のあつもりホール (A 会場: 300 名収容) と大会議室 (B 会場: 100 名収容) の 2 会場を、ポスター発表は「エコールみよた」の 1 階ロビー及び 2 階回廊の 2 箇所を利用して行われた (写真 1)。特に、口頭発表の 2 会場は 2 階廊下を通じて近接した場所にあり、両会場の行き来は極めてスムーズに行うことが出来た。企業展示会場には 2 階の大会議室と 2 階回廊の 2 箇所を使用した。口頭発表では浅間火山、霧島火山、桜島火山のセッションを設け、計 36 件の発表が行われた。

また、昨年の大会から始まった学生優秀発表賞では、学生による口頭発表 18 件、ポスター発表 27 件の計 45 件を対象として 34 名の審査員が審査を行った。その結果、下記の 4 名が受賞した。

松本恵子 (東北大学大学院理学研究科): 桜島大正噴火軽石に含まれる磁硫鉄鉱の脱硫化反応: マグマの酸化速度計の開発に向けて

無盡真弓 (東北大学大学院理学研究科): 新燃岳 2011 年噴火噴出物中にみられるナノライトの晶出過程

森田考美 (富山大学大学院理工学教育部): 構成物組成及び本質物の全岩組成から見た男体今市テフラを

形成したプリニー式噴火の推移とマグマ供給系
大類 瞬 (神戸大学大学院理学研究科): 三瓶火山の太平洋火砕堆積物の形成過程

b. 研究奨励賞受賞者記念講演会

10 月 15 日 午後のポスターセッションコアタイム終了後に、日本火山学会臨時総会が開催され、その最後に 2012 年度日本火山学会研究奨励賞を受賞した石橋秀巳氏による受賞記念講演「結晶作用がマグマの粘性に及ぼす影響」が催された。石橋氏の講演では、氏がこの様な研究課題に取り組むようになった経緯が詳しく紹介され、また、今後の展望についても語られた (写真 2)。

c. 懇親会

会期 3 日目の 10 月 15 日、記念講演終了後、軽井沢



写真 1. ポスター会場の様子



写真 2. 記念講演をする石橋秀巳氏

町に移動し、軽井沢プリンスホテル ウェスト 「千曲の間」で18時30分から懇親会が催され、158名の参加者が集った。主催者を代表して高橋正樹日大教授が挨拶し、その後、茂木祐司御代田町長からご挨拶を頂き、荒牧重雄東大名教授による乾杯で懇談に入った。今大会では地元で火山学会員が不在であったが、大会を共催した浅間縄文ミュージアムの堤隆主任学芸員が学会員顔負けの大活躍で大会成功に貢献した。堤氏から懇親会に参加した学会員への挨拶を頂き（写真3）、それに引き続き、本年度の日本火山学会研究奨励賞を受賞した石橋秀巳氏、日本火山学会論文賞を受賞した小園誠史氏からそれぞれ挨拶があった。次いで、今回の秋季大会実行委員会を代表して中村洋一宇都宮大学教授の挨拶があり、最後に宇都浩三会長の挨拶で閉会となった。

d. 団体展示

学会期間中、8社【(株)アコー、(株)キュービック・アイ、(株)近計システム、(株)ジオサーフ、(株)測位衛星技術、(株)東邦マーカントイル、(株)白山工業、(株)パレオ・ラボ】の企業展示と、1研究機関【産業総合技術研究所地質情報展示部門】の展示が行われた。企業展示の場所は2階ポスター会場に隣接する中会議室と2階回廊に設けられた。さらに、団体展示を申し込んだ企業には、各社のホームページを火山学会秋季大会のホームページにリンクし宣伝に努めた。

2. 野外討論会

◎浅間山：黒豆河原周辺の溶岩及び火砕流堆積物

現地討論会 A コース「浅間山」は、10月13日に高橋正樹、安井真也の2名を案内者として総勢25名で行われた（写真4）。本巡検は浅間火山東北東麓の黒豆河原周辺を徒歩で巡り、4世紀以降の歴史時代噴出物を観察して、火砕成溶岩や中間型火砕流堆積物の成因について議論するというものであった。

9時にしなの鉄道御代田駅をマイクロバス（御代田町による無償提供）で出発し、黒豆河原に到着した。今回の巡検コースは鬼押ハイウェイ有料道路から山側に位置しており、一般人は立入りを制限されているため、私たちは特別の許可をとり、腕章をつけて六里ヶ原休憩所から徒歩で観察地点へ向かった。最初に観察したのは、4世紀中頃の大規模噴火の噴出物である黒豆河原溶岩とそれを覆う小滝火砕流堆積物であった。黒豆河原溶岩は溶結凝灰岩の様相を呈する火砕成溶岩であるとのことで、その流下の最中に発生したと考えられる小滝火砕流堆積物は下位から上位に向かって溶結度が高くなる産状が認められた。つぎに1108年の天仁噴火に伴う上舞台溶岩の側端崖に向かった。上舞台溶岩は径数mに及ぶキャ



写真 3. 懇親会で挨拶をする堤 隆氏



写真 4. 現地討論会 A コース参加者の集合写真（市川八洲夫氏撮影）

ベツ状本質岩塊を多量に含むことが特徴であり、それらが溶結した構造も見られた。そうした産状から上舞台溶岩は通常の溶岩とは考えにくく、その形成メカニズムについて活発な議論が行われた。その後は黒豆河原一帯を広く覆う1783年天明噴火による吾妻火砕流堆積物を何箇所かで観察した。吾妻火砕流堆積物は3つのユニットからなるが、上舞台溶岩上では最上位の第3部層のローブ (lobe) やレヴィー (levee) などの火砕流の堆積地形がよく保存されている。また、第3部層にはキャベツ状本質岩塊の濃集が認められ（写真5）、そのことは中間型火砕流である吾妻火砕流の大きな特徴の一つとなっている。

今回の巡検は終日徒歩での観察地点を巡るという日本火山学会の現地討論会では初めての試みであったかもしれない。しかし、天候にも恵まれて参加者は美しい火山の景色や露頭観察を楽しむことができた。そして何よりも黒豆河原は案内者らが主張する「プロキシマル火山地質学」を議論するのにふさわしいフィールドであり、非常に有意義な巡検であったことは間違いない(宮縁育夫)。

◎草津白根山

Bコースの草津白根山巡検は、寺田暁彦、上木賢太の二名の案内で行われた。10月16日午後～17日昼過ぎまでの日程で、参加者は案内者を含め17名であった。1日目は、学術講演会終了後、大会会場前に集合し、東京工業大学火山流体研究センター(草津白根火山観測所)の公用車2台を含む4台の車に分乗して本白根山に向かった。本白根火口壁の溶岩や凝灰角礫岩を観察し、角礫岩の固まりが溶結か化学反応かなどの議論が交わされた。案内者も経験が無いという程の好天に恵まれ、山頂から見た夕映えの浅間山や四阿山は絶景であった。夜は、草津温泉と民宿での交流を満喫した。2日目は、まず、草津町温泉課を訪問し、温泉供給のシステムを見学した。源泉からの温泉水の温度を調整する熱交換機や、各宿泊施設等へ送り出す大元締め配管系に圧倒された。その後、温泉課の方の案内で、草津温泉の心臓とも言える万代鉱源泉を見学する、貴重な体験が得られた。万代鉱では、水平坑の掘削中に94度の温泉水が噴出し、鉱山としての使用は断念された。1974年に、草津町が温泉として利用を始めたという。歩道のように組まれた丸木が硫黄に覆われて、湯気に煙った穴の奥へ向かい、鉱山時代の名残が感じられる。発見当時の様子が様々に想像されるが、詳しい記録は残されていないらしい。紅葉の万代鉱源泉で集合写真を撮影した後、参加者の強い希望で湯釜の見学に向かった。湯釜での観測の説明も聞きつつ、秋晴れの空と湯釜の景観を楽しんだ(写真6)。駐車場で解散し、軽井沢駅他、各参加者の移動経路に合わせて分乗し、移動した。

本巡検プログラムは、火山だけでなく、火山活動の一部でもある温泉と人々の生活の関わりや、町の防災など、火山学に関わる問題を様々な側面から見ることでできるよう配慮されていた。秋山の清々しさとは対照的な重い問題も取り上げられ、それぞれに学ぶところの多い巡検だったのでは無いだろうか(市原美恵)。

3. 公開講座「火山防災シンポジウム」

公開講座「火山防災シンポジウム」は、10月13日(土曜日)の13:30-17:00に長野県御代田町エコールみよた「あつもりホール」で開催された。御代田町茂木祐司



写真 5. 天明噴火に伴う吾妻火砕流堆積物に含まれるキャベツ状本質岩塊



写真 6. 現地討論会Bコース参加者の集合写真

町長による挨拶があって、コンビナーを火山防災委員会世話人の中村洋一(宇都宮大学)と藤田英輔(防災科学技術研究所)としてすすめられた。第一部は「浅間山と火山防災」についてで、「浅間山の火山活動の現況と観測体制」を武尾 実(東京大学地震研究所教授)、「浅間山の融雪型火山泥流防災対応」を宮下 誠(気象庁浅間山防災連絡事務所長)、「浅間山の火山防災体制」を荒牧重雄(東京大学名誉教授)の各氏による講演があって、その後質疑応答がすすめられた(写真7)。第二部は「火山と考古学」についてで、「イタリアバソビオ火山の噴火と遺跡」を藤井敏嗣(東京大学名誉教授)、「天明3年(1783)の浅間山噴火と火山災害遺跡」を堤 隆(浅間縄文ミュージアム学芸員)の各氏による講演があって、その後に質疑応答がすすめられた。会場の出席者と講演者による質疑応答では、浅間山の火山活動の現況と監視観測体制、浅間山で発生の可能性が指摘されている火山泥流の防災体制、さらに噴火活動によって埋没した遺跡の状況などの話題について、活発な議論がすすめられた。地域住民



写真 7. 公開講座「火山防災シンポジウム」での質疑応答の様子

の方々の浅間山の火山活動と防災に対する関心の高さがうかがえた(参加総者は約 180 名)。なお、この講演予稿集 PDF 版は日本火山学会の HP で公開される予定である。

4. 公開講座「火山学者と火山を作ろう! at 浅間」

火山学会では数年前より、大会開催に際して火山学を楽しく、分かりやすく伝える子供向けの実験講座を開催している。本年度もこの流れを継続しつつ、浅間火山の噴火の特徴や、昨年発生した霧島火山新燃岳噴火の活動を考慮して、火山の音に注目した講義を企画した。当日は、講師 3 名(林信太郎、市原美恵、久利美和)とアルバイト学生(東京大学地震研究所 3 名・日本大学 1 名)の他、岡山悠子(日本科学未来館)、福井 萌(地震研究所アウトリーチ室)、及び、Sandrine Cevuard(バヌアツ共和国からの JAICA 研修生)の各氏にお手伝い頂いた。参加者は、子供が約 20 名、保護者 15 名、見学者 5 名、であった。講義は以下の構成で進められた。

○全体講義と実演(進行:久利美和)

マグマと火山の話(林信太郎)

マヨネーズやソースを使った粘性の説明やコーラの噴出実験など、実演と巧みな話術で、子供達を講義に引き込んだ(写真 8)。

聞き取れない低周波音(市原美恵)

オシロスコープとビデオ映像を組み合わせ、ドアの開閉する時の聞き取れる音と聞き取れない低周波音について説明した。

○グループ実験

グループ 1(岡山悠子・市原美恵)

火山の噴火映像と音を視聴させ観察結果を記録させつつ、両者の対応をクイズ形式で考えさせた。また、オシ



写真 8. 実験講義でのコーラ噴出実験



写真 9. 実験講義でオシロスコープとビデオを使って周波数を説明

ロスコープとビデオで参加者の声と動きを記録し、早回し/遅回しで、音の周波数について説明した(写真 9)。

グループ 2(久利美和・林信太郎)

レオロジーの異なる様々な流体を用い、その中や表面における泡の挙動と音の変化を観察する実験(写真 10)と、溶岩ドームや溶岩ケーキを作る実験を通して、マグマの粘性と火山活動の関係を考えさせた。

小学校高学年から中学生を想定した講義内容であったが、参加者の大半は、小学校低学年で、幼稚園児と思われる小さい子供もいた。そのため、音波や噴火のメカニズムに関する説明はあまり深く行わず、楽しく観察・体験をしてもらうことを優先させた。年齢の大きい参加者には物足りなかったかも知れない。一方、小学生低学年でも、驚くほど内容をよく理解している児童もいて、驚かされた。

この実験講義は、科学研究費補助金(研究成果公开发表、仮題番号 2453002)を受けて企画された。同様の講



写真 10. 実験講義における泡のぶくぶく実験

義を、霧島火山地域でも行うことになっている（12月8日：小林市、12月9日：霧島市）。浅間での開催は、概ね成功ではあったが、参加者の集め方や、進行方法について反省点もある。今回の経験を生かし、霧島でのイベントを有意義なものとしていきたいと考えている。

5. 大会運営を振り返って

御代田町で開催された今大会は、「エコールみよた」というすばらしい会場に恵まれ、同会場に併設されている浅間縄文ミュージアムとの共催で開催することが出来たため、会場費も節約できるなどの好条件で成功を収めることが出来た。今大会の開催に於いては、御代田町から会場の「エコールみよた」を無償で提供して頂いたほか、浅間山の野外討論会に町のバスを使用させて頂くなど、多大のご支援を頂いた。また、同ミュージアムは秋季大会に合わせて特別展示「浅間火山」を企画し、大会参加者の多くもこれらの展示を楽しむことが出来た（入館者数153名）。また、講演会場は100名以上収容可能なスペースを2箇所確保でき、さらに2会場とも隣接した場所で両会場の行き来の便も大変良かった。同会場は月曜日（10月15日）が休館日であるが、秋季大会のために休館日を返上して会場を提供してくれた。同会場には町の図書館も併設されているため、開館日は図書館を利用する一般の方の来場もあるが、休館日の10月15日には全館貸し切りとなるため、ポスターセッションのコアタイムを15日に設定して、1階ロビーと2階回廊のスペースをフルに活用してポスター展示とコアタイムをこなすことが出来た。しかし、1階ロビーのみではスペースが不足で2階回廊と2箇所に分けざるを得なかった点が参加者に不便を掛けることになった。

講演会場のB会場では、初日に椅子の数が少なく、多くの参加者に不便を掛けることになったが、2日目以降、急遽、椅子を増やし何とかほとんど参加者が席に着けるように出来た。また、A会場では、プロジェクターの照

度が弱かったため、会場の後ろの席ではスライドがよく見えないとの意見が寄せられたため、2日目以降、プロジェクターを変更して対応した。細かい点では対応に手間取る点なども有りご不便をおかけしたが、全般的には円滑に大会運営を行えたと思っている。但し、企業展示の会場はポスター会場に隣接した場所に設定したが、中会議室は入り口から中の様子がよく見えないこと、ポスター会場を2カ所に分けざるを得なかったために、参加者が分散して2階回廊の展示場所にも参加者の来訪はあまり多くなかった。講演会場で企業展示の案内を何回かアナウンスしたが、あまり効果が無かった。今後、企業展示の設置場所や展示の仕方を工夫する必要がある。2階和室を休憩室としてコーヒー、緑茶、紅茶等の飲み物を用意した。休憩室が2階回廊の端に位置していたため、利用する参加者はそれほど多くはなかったが、発表準備のために利用している参加者も見受けられた。

今大会では、火山防災シンポジウムと公開講座「火山学者と火山を作ろう！ at 浅間」を初日に実施したが、このシンポジウムと公開講座のチラシを作成して、地元の住民、小中学生への宣伝に努めた。元々この地域は浅間山麓であるため、火山活動への関心は高く、また、最近、融雪型泥流の被害想定に関する住民説明会が行われたこともあり、防災シンポジウムには約180名という多くの住民の方の参加が得られた。一方、チラシの完成が大会一ヶ月前を切ったこともあり、地元小中学校への公開講座の宣伝は出遅れた感があったが、当日は20名を越える小中学生の参加があり、盛況の内に終わることが出来た。なお、この公開講座は火山学会が主催して12月に霧島新燃岳周辺の小林市（宮崎県）と霧島市（鹿児島県）での開催も予定されている。

大会会場を選定する上で、御代田町の交通の便と周辺に宿泊施設が少ない事が懸念された。大会参加者の皆様には、御代田町内だけでは宿泊を確保することが出来ず、軽井沢町、小諸市、佐久市と会場から離れた場所に宿泊せざるを得なかったことに、実行委員会として大変申し訳なく恐縮している。しかし、開催地、御代田町のご協力あってこそこの大会であったこととはご理解頂けたと思う。幸い、大会期間中は好天に恵まれ、浅間山のきれいな山容を堪能できたことに感謝したい。

懇親会会場の確保も大変苦心した。紅葉時期の軽井沢ではとても高くして懇親会を開催することは困難と思い、周辺の市町村で会場を探したが、なかなか良い場所が見つからなかった。しかし、これも浅間縄文ミュージアムの堤主任学芸員のご尽力で、軽井沢プリンスホテルを格安の料金でお願い出来ることとなった。場所柄、皆様に十分満足頂けるだけの食事の量を確保できなかったこと

は心苦しく感じているが、2時間の短い時間とはいえ、飲み放題でそれなりに楽しんで頂けたのではないかと思います。

6. 実施体制

今回の大会実行委員会は以下の通りであった。

現時実行委員会：武尾 実（東大）、市原美恵（東大）、高橋正樹（日大）、安井真也（日大）、堤 隆（浅間縄文ミュージアム）

大会委員会プログラム編集編成会議 市原美恵（東大）、松島 健（九大）、下司信夫（産総研、大会担当理事）、安井真也（日大）、武尾 実（東大）、棚田俊收（防災科技研）

火山防災シンポジウム：中村洋一（宇都宮大）、藤田英輔（防災科技研）

公開講座：林信太郎（秋田大）、市原美恵（東大）、久利美和（東北大）、吉川美由紀（阿蘇火山博物館）

野外討論会：浅間山コース：高橋正樹（日大）、安井真也（日大）、草津白根山コース：寺田暁彦（東工大）・上木賢太（東工大）

学生優秀発表賞審査委員（順不同、所属略）

林信太郎、篠原宏志、中田節也、伊藤順一、松島健、津久井雅志、渡辺秀文、山本圭吾、森田裕一、佐藤博明、及川輝樹、羽生 毅、宮縁育夫、前野深、浜口博之、宝田晋治、森 俊哉、鹿野和彦、佐々木寿、石塚 治、上田英樹、佐々木実、大場 司、植木真人、筒井智樹、川本竜彦、嶋野岳人、藤田英輔、金子克哉、菅野智之、村上 亮、中村洋一、奥野 充、奥村 聡